

火焰樹

北方謙三



か えんじゆ
火焰樹

きたかたけんぞう
北方謙三

© Kenzo Kitakata 1992

1992年1月15日第1刷発行

発行者——野間佐和子

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-01

電話 出版部 (03) 5395-3509

販売部 (03) 5395-3626

製作部 (03) 5395-3615

Printed in Japan

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。
送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内
容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いい
たします。 (庫)



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

デザイン——菊地信義

製版——大日本印刷株式会社

印刷——大日本印刷株式会社

製本——株式会社大進堂

ISBN4-06-185067-9



講談社文庫

火焰樹

北方謙三

講談社

火焰樹

第一章

1

空気には、流れる道というやつがある。

それをよく考えて薪を組んでやると、焚火は簡単に燃えあがるものだ。一時は強く燃え盛つても、炎の勢いはすぐに弱くなる。薪を動かし、別の空気の道を作つてやればいい。薪と薪をあまじく密着させず、ちよつとだけ隙間をあけてやると、空気はそこを通り、新しい炎を生むのだつた。

どのあたりから炎が出てくるか。それがどうかたちをしているか。私の予測は、ほぼ当たるようになった。そうなるまでに、三年の時間と、大量の薪が必要だった。

炎を見つめている時、私の手は自然に動いて、薪と薪の間に新しい空気の道を作っている。それは、薪が燃えつきて灰になるまで続いた。考えごとをしているわけではない。むしろ、なにも考えていない時間の方が多いだろう。私の燃やす薪は一日五本と決まっていって、それより増えることもなければ減ることもない。薪の太さによって、いくらかの時間の違いがあるだけだ。

薪は、二メートルに切り揃えた丸太を運びこませる。それを自分で五本に切る。斧で二つから

四つに断ち割る。太いものは、直径が五十センチもあるのだ。そうやって割った薪を、五本ずつ縛って壁の脇に積みあげてある。すでに、何百束の薪が積み重ねられているだろうか。私がこれから生きなければならぬ日々を、積みあげているようなものだった。

薪に使う木は、カラマツと決めていた。理由はない。はじめに燃やしたのが、それだったのだ。斧の使い方は、うまくなった。タイミングと角度。それがすべてだ。五十センチの薪も、なんの抵抗もなく割れる。最初のころは力まかせで、その日の分の薪を割ると、掌が痺れて一日使えいものにならなかったものだ。

雨の日は、部屋にしつらえた暖炉で燃やす。火をつければ燃えるようになっていく暖炉では、やることはなにもなかった。冬の寒い日も、薪は五本しか燃やさない。あとは小さな石油ストーブで暖をとるだけだ。

群馬県の山間にある小さな村のはずれだった。前は画家が住んでいてアトリエにしていたという小屋を、安い値段で買ったのだ。別荘地というわけではない。ちよつと歩くと、平らな土地にはビニールハウスが並んでいる。村の人間とまったくと言っていいほど付き合わない私は、そこでなにが栽培されているかさえ知らなかった。

薪を燃やす以外の私の日課は、山道を五キロほど歩くことだった。それから小屋に入り、木を削る。深香木と呼ばれる楠の一種で、大して堅くはなかった。芸術品を彫っているわけではない。三十キロほど山奥に入った温泉地で、土産物として売られている木彫人形だった。鑿（のみ）など使わず、ナイフだけでそれを削っていく。ひとつ作るのに、三日かかった。一週間に二体。それで

一日は休日という計算になる。

ほかのものととはタッチが違ふ私の人形は、そこそこの値で売れ、十数体まとまった時に運びあげていくと、大抵前のものはなくなっていた。もったも、商売として成り立つようなものではない。機械を使えば一時間でできあがりそうなものに、三日かけているのだ。

秋になった。

明け方の冷えこみで、それが感じられる。

冬仕度が、特別あるわけではなかった。新しいセーターを着てみることにしろ。新しいものは、なぜか軀に馴染まない。いや心に馴染まないのかもしれない。はじめは、一日一時間ほど着ている。それが三時間になり、五時間になり、一日じゅう着ていても気にならなくなってくる。

電話が鳴ったのは、袖にすぐ毛玉ができてしまう、厚手のセーターと悪戦苦闘している時だった。仙人になりきっているというわけではない。時には、電話がけたたましい音をたてることもあった。

六回目のコールで、私は受話器をとった。

「大津です」

声が若い。息子の方だった。

「久しぶりだな。また家出をしたくなかったか」

広介は、二年ほど前、家出をしてここに転がりこんできた。親父に殴り倒され、殴り返すこと

ができずに飛び出したのだ。

「実は、親父がそっちじゃないかと思ひまして」

「いや。この三カ月ほど、やつとは電話でも話してない」

「そうですか」

「どうかしたのか？」

「いえ、なんでもありません。出かけてて帰ってきたら、いなかったもんで」

口調に、微妙にひっかかってくるものがあつた。待ったが、次の言葉は出てこない。

「とにかく俺は、一年近く会ってもいない」

「そうですか」

またかけます、と言って広介は電話を切った。今度は、親父の家出というわけか。二年前の父子喧嘩は他愛ないもので、電話でどやされると、広介は慌てて帰っていった。

家出なら、親父の方こそ私のところへ転がりこんできそうだった。広介は三日間この小屋に泊った。大津は、広介が私のところにいることを、多分子想していたのだろう。

セーターの毛玉をとっているうちに、私は電話のことを忘れた。

セーターを脱いで、革のジャンパーに着替えた。食事は、自分で作ることも多い。結構凝った料理を、時間をかけて作ることもある。下の街まで食事にいこうと思うのは、いつもひどく消極的な気分の時だ。気持が前にむいている時は、焚火も丁寧にやり、ナイフの使い方も細心になり、小屋の隅々まで舐めるように掃除をする。

つまりは、世間から離れていようという意志が強くなるのだ。

小型のジープのエンジンをかけた。これから雪が多くなると、この車は重宝だった。幌はいつもかけてある。そうしていると、普通の乗用車よりずっと中は見にくいようだった。フルオープンで走るほど、私にはジープは似合いはしなかった。

下の街で、私が食事をするのは、一軒の食堂だけだった。刺身や焼魚などというメニューがあるのだ。それから、酒を飲みに行く店も、一軒ある。

陽が落ちるのが早くなった。六時にはまだ間があるが、すでに薄暗い。

街までは暗い道だった。両側にはビニールハウスと雑木林しかない。車で三十分といったところだろうか。酔っ払っていると、もっと速く走る。

お茶漬と烏賊いかの刺身で簡単に食事を済ませた。ついでのようにして『トンボ』に寄る。客はまだ少なかった。

秋沢が、黙ってオン・ザ・ロックとチェイサーをカウンターに置く。三つあるボックス席のひとつに、若い男女の二人連れがいるだけだ。

グラスの中の大きなひとつの氷のかけら。ロックとロックスでは違うのだ、とはじめての時秋沢は言った。ようやく三十になったばかりのようだが、つまらないことにこだわりの、どこか老人臭いバーテンだった。

二杯目のグラスをあけた時、佐和子が出勤してきた。

「三週間ぶりってとこね」

私の隣のスツールに腰を降ろし、煙草に火をつけてから言った。

禁煙して、三年半になる。眼の前に箱が置かれていても、決して手はのばさない。禁煙したことに、理由はなかった。やるのが、禁煙ぐらいしかなくなってしまったのだ。

「ほかの女の子は、ママより出勤が遅いというわけか」

「千恵は休みよ。もう四日目になるわ。敏子ちゃんは、もうすぐ来ると思うけど」

「店をやめるね、千恵ちゃんは」

「そんなこと、ないわよ」

佐和子は私の耳に口をつけ、子供を墮ろしたのよ、と言った。ありそんなことだった。三杯目のオン・ザ・ロック。秋沢は一杯ごとに氷を取りかえる。多分意味があるのだろうが、訊けば長たらしい説明をしそうだった。

この店のいいところは、カラオケなどがないことだった。BGMも、ボリュームを絞りとんである。大抵の場合、かかっているのは静かな曲だ。

男が入ってきて、ボックスに腰を降ろさず、カウンターのの方にやってきた。私と肩を並べ、オン・ザ・ロックを注文した。

「外の車、おたくのですか。あのジープ」

「邪魔かね？」

「いや、いいですよ。俺は別のところへ車を駐めたから」

この街の人間ではない。なんとなく、それはわかる。不躰がしつけな感じの男だ。

「雪は、まだ降らないだろう？」

私に言ったのか秋沢に言ったのか、よくわからなかった。私は黙って横をむいていた。

「十一月の終りからだわね、早くて」

秋沢も無言だったので、佐和子が気を使って言った。男はちょっと頷^{うなず}いただけだった。四十になるかならないかというところだろう。ふらりと入ってくる客は、めずらしい。この店だけでなく、街に十軒ほどある酒場ならどこでもそうだ。

敏子が出てきて、男の隣に腰を降ろした。ボックス席の二人には干渉しない方がいい、と佐和子は判断しているのだろう。

オン・ザ・ロック五杯で、私は腰をあげた。

「時間ないの、今夜は？」

送って出てきた佐和子と言う。むき出しの媚^{こみ}を、私は無視していた。

「この間逢ったの、三週間前よ」

三週間前は、ジープの助手席に佐和子に乗せて、深夜のドライブをした。三十分ほど走ると大きな街があり、そのはずれにモーターが七、八軒並んでいるのだ。

人の眼を、いつもひどく気にする。この街のホテルなど、前を通るのもいやがるだろう。これが田舎というやつだ。私は、人の眼をいつも無視してきた。三年もそうしていると、それはそれで通用してしまふのだ。

「来週になったら、時間ができるかもしれない」

「わかったわ」

しつこいことは言わない。四十を越えた、大人の女なのだ。ほかに付き合っている男はいるかもしれないし、それに干渉しようという気が、私にもない。私も、五十を前にした大人だ。

ジープを飛ばした。ヘッドライトはハイビームにし、対向車線まで使ってコーナーを曲がっていく。ヒール・アンド・トウ。車高が高いのでスポーツカーのようにとはいかないが、誰かが見ていたらちょっとびっくりするようなスピードであることは確かだ。

中ぶかしの音が、闇の中でけものの咆哮のように聞える。帰りは登りが多いので、頻繁なシフトダウンは必要なかった。

下りは三十分近くかかるのに、上りは十五分だった。体に、多少の酒が入ると、私はそういう運転をする。

石油ストーブに火をつけた。

明りを消し、ウイスキーのボトルを抱いて、闇の中にうずくまった。ストレートで、少しずつ胃に流しこむ。チェイサーもなにもなしだ。そんな飲み方をするようになったのも、この三年の間だった。大した量ではない。ただ、眠るまでずっと、同じペースで飲み続ける。週に三本の割りで、ウイスキーのボトルは空になっていく。

食事もし、酒も飲む私の生活は、もしかすると健康なのかもしれない。いつでも酒がやめられるならばだ。三年の間、食事を抜いたことは数えきれないが、酒を飲まなかった日はほとんどない。

石油ストーブの青白い炎。光といえば、それだけだった。次第に、頭がぼんやりとしてくる。そうってから一時間か二時間、私は思い出したように酒を飲むはずだった。

2

ナイフを研いだ。

持っているのは四本だが、刃が鈍くなったものだけを研ぐ。そうやって、順番に使っていくのだ。バックが二本とガーバーが一本。それにカスタムナイフが一本だった。

焚火は終わっていた。薪は、三十本ほど割った。それでも、二メートルに切り揃えたカラマツの幹は、まだ山ほど残っている。さらに二トン車の荷台に一杯、運びこまれてくることにもなっていた。

人形にとりかかった。仏像のようなものを彫ってみないか、と土産物屋の主人に言われたことがあるが、関心はなかった。仏や神を信じている人間が、やればいいことだ。

私が彫るのは、うなだれて立った男の姿であったり、両手を挙げている子供であったり、抱き合った男女であったりというところだ。人形というのも、自分でそう言っているだけの話で、土産物屋では民芸木彫ともっともらしい名がつけられていた。

薄く、木を削ぎ落としていく。はじめは直径が十センチほどの丸太だが、いつの間にか人のかたちになっている。自分であまり意図していなくても、自然にそうになっているのだ。人の姿がぼ

んやり見えてきたところ、なにを彫るか決める。大人か子供か。男か女か。

腰を降ろしている椅子も作業台も、自分で作ったものだ。四十五を過ぎてから、自分が器用であることに、ようやく私は気づいた。子供のころからそれに気づいていれば、違う人生になったかもしれない。

ドアがノックされた。

チャイムなどはない。来客は、ノックするか声をかけるかだ。こんな村にも、磁気マットや車のセールスマンはやってくる。保険の勧誘員もいる。

ドアの外に立っていたのは、きのう『トンボ』で会った男だった。

「すごい運転をするんですね」

「どういう意味かね？」

「俺のRX7でも追いつけなかった。もっとも、道を知らないんで、慎重に走るしかなかったんだけど」

やはり不躰な男だ。片足は、玄関の三和土たきに踏みこんできている。

「きのう、私を尾行したのか？」

「話が終わってなかったんでね。追いかけただけですよ」

「ということは、『トンボ』に入ってきたのも私に用があったからか？」

「いけませんか」

「入るのは勝手さ」

「そうですよね」

「うちには、灰皿がないんだ」

煙草をくわえた男が、火をつける前に私は言った。ちよつと肩を竦め、男は煙草をパッケージに戻した。

「運転していいんですか、アル中なのに？」

「アル中じゃない」

「家の裏の空瓶の山、見ましたよ」

「捨ててないだけさ。ああいうゴミを集める日がいつだか、誰も教えてくれなくてね」

「しかし、半端な量じゃない」

私はただ笑い返した。少々挑発に乗ってしまったほど若くもなかった。男は、ちよつと首を横に振った。私から眼をそらそうとはしない。小柄で、じつと見つめてくる眼は、愛玩犬を思わせるようなところがある。

「いまも、飲んでますね」

「ビールさ」

「ビールだって酒ですよ」

「麦のジュースだと、私は思ってる」

男が笑った。笑うと、いっそう愛玩犬に似ていた。上着のポケットに手をつっこみ、男はまた煙草をくわえた。